手仕事を生業に。承け継ぎ、守り続ける暮らしの灯。

「小さな工務店」の第一歩

令和4年4月1日――。先代から家業を承け継いだのが、大工の木村芳生(よしお)さん(当時48歳)です。

芳生さんは「木村工務店」の3代目。事業を継いだ当初、父であり、2代目でもある和友(かずとも)さん(当時75歳)と2人で、工務店を営んでいました。

事業承継の話が出始めたのは、和友さんが65歳になった頃。「芳生、工務店だけど、後はどがぁするかぁ」と、よく口にしていたのだそう。芳生さん自身、「父の後を継ぎたい」という気持ちを持っていたものの、「まぁ、まだ先のこと」と深くは考えていませんでした。

その理由は2つ。一つは、和友さんがまだまだ元気だったこと。もう一つは、芳生さん自身も「何をすればいいのか」「何から手をつけていいのか」が分からなかったことでした。

そんなこんなで、約8年が過ぎた頃。事業承継の話が一気に進み出します。きっかけは、和友さんが飯南町商工会に相談をしたこと。その時相談に乗ってくれたのが、事業承継推進員の景山泰治(やすはる)さんでした。

背中を押した「大きな存在」

景山さんの第一手は、商工会の新(あたらし)経営指導員との連携。2人で和友さんの心配ごとや、困りごとなどを聞いていきました。

そんな中で出てきたのが、税金面の漠然とした不安。2人は、アドバイザーとして税理士の派遣を決定。土地を含めた和友さんの資産を評価した上で、木村工務店に最適な承継の形を探っていきました。

その後、和友さんが廃業届を、芳生さんが開業届を税務署に提出。芳生さんが、和友さん名義の土地や建物、車を借りる形で、事業を承継しました。

2カ月後の令和4年6月。和友さんは、突然帰らぬ人となりました。「今思えば、最後の一年間の父は、何か焦っていたようにも感じます」と、当時を振り返る芳生さん。「頑固でこわい父親だったけど、いろんなことを教わりました」と続けます。

仕事中は無口だったという和友さん。でも、家に帰ると、2人で一緒にテレビを観たり、お酒を飲んだりしたのだそう。「家でも仕事場でも一緒だけぇ、メリハリをつけんとのぉ」が、和友さんの口癖でした。

「家業」を継ぎ、「名前」を残す

そんな父と25年間一緒に仕事をしてきた芳生さん。一人になった今だからこそ、和友さんのすごさが身に染みるそうです。

「尺竿(しゃくざお)」と「差し金」を手に、木材の長さを瞬時に把握していた和友さん。「墨付(すみつ)け」もお手のものだったのだそう。「図面を見たら、頭の中で家が建つんでしょうね。まだまだ遠い存在です」と話します。

新築などの仕事が少なくなった今、「地域の人のかゆい所に手が届く工務店としてあり続けたい」と芳生さん。どんな仕事を頼まれても、できることは断らずにやっていた和友さんから学んだ姿勢です。

それともう一つ。「当たり前を当たり前にできる大工であり続けたい」という信念も授かりました。

「大工」という家業と、「木村工務店」の名前を残したかった芳生さん。これからもこの地で、ずっと見ていた背中を目指し、歩み続けます。

国道54号を通ると、時折目に入る看板――。その名も「木村工務店」。大きな先代から承け継いだ小さな工務店は、飯南町下赤名にあります。

事業承継を終えた今でも、ときどき顔を合わせる3人(左から:木村さん、景山さん、新さん)。木村さんの父・和友さんも一緒に、4人で語り合った記憶が蘇ります

柱や梁(はり)になる木材に、線を引いたり、印をつけたりする「墨付(すみつ)け」。手にしている「尺竿(しゃくざお)」と「差し金」は、和友さんから承け継いだ大切な道具です

どんな時も欠かさない道具の手入れ。怠ると、切れなかったり、加工の跡がよくなかったりします。鉋(かんな)の刃の切れ味チェックは指先で。軽く当てて皮膚に引っ掛かれば合格です

事業承継の相談窓口

〔島根県事業承継・引継ぎ支援センター〕

支援内容

- 事業承継や事業継続を図るためのアドバイス
- 事業承継計画の策定支援、計画実行フォロー
- 事業承継に関わるさまざまな課題には専門家を派遣
- 国や県の補助金等の支援の情報提供
- 事業引継ぎに係るマッチング支援 など

■問合せ ☎0852-33-7501〈松江商工会議所内〉

詳細はこちら

〔飯南町商工会事業承継推進員〕

景山 泰治(やすはる)さん

- 推進員への相談は無料です
- 秘密は厳守します

■問合せ ☎76-2118